

秋田県民歌 とスポーツ、地域文化

～ 地域をつなぐ要としての音楽 ～

元秋田県職員 澁谷 次男

はじめに

元号が令和に変わった昨年（2019年）、日本列島はラグビーワールドカップにおける日本代表の活躍で大いに沸いた。選手と観客が一体となって「カントリー・ロード」の替え歌を歌ったことは、記憶に新しいところである。

そのような、音楽とスポーツとの結び付きについて、秋田ではどうだろうか。実は、秋田で「スポーツとともに歌って盛り上がる曲」は、秋田県民歌なのである。ご存じない方は、一体どうしたことなのか、と思われることだろう。あるいは、県民の多くが歌える県民歌の代表と言えば長野県の「信濃の国」を想像される方が多いと思われる。実際に、長野のプロスポーツチームの試合でも「信濃の国」は歌われているようだ。しかし、秋田県民歌も負けてはいない。

本稿では、秋田県民歌とスポーツとの結び付きについてはもちろんのこと、秋田県民歌がいかにかたち秋田県民の生活に根付いているかについてご報告したい。

秋田県民歌 とスポーツ

さて、読者諸氏におかれては、「秋田県とスポーツ」のキーワードから、何を思い浮かべられるだろうか。「雪国」秋田であるので、スキーやスノーボードなどのウィンタースポーツはもちろん盛んである。しかし、ウィンタースポーツに限らず、古くはオリンピックの体操競技で活躍した小野喬・清子夫妻から、最近では、県立金足農業高等学校野球部（吉田輝星投手は、筆者の住む秋田県潟上市出身）の活躍や、バドミントン世界選手権で連覇を果たした「ナガマツ（永原和可那・松本麻佑）」ペアの活躍まで、秋田とスポーツとの関係には様々な側面がある。

その中でも、今、秋田で最も盛り上がっているスポーツと言えば、バスケットボールである。秋田県では、かつて県立能代工業高等学校が男子バスケットボールの全国大会で活躍していたことから、バスケットボールに特別な思い入れのある人が多い。男子プロバスケットボールリーグ「Bリーグ」に所属する「秋田ノーザンハピネッツ」の試合には、チームカラーである「ハピネッツピンク」をまとったプースター（サッカーでは「サポーター」と言うが、バスケットボールやアメリカンフットボールでは「プースター」と言う。）が大挙して訪れ、熱狂的な応援を重ねている。

この「秋田ノーザンハピネッツ」のホームゲーム名物が、「県民歌斉唱」なのである。「クレイジーピンク」とも称されるピンク色のハピネッツのブースターと選手が、試合開始前に全員で県民歌を歌う。起立し、「声高らかに、ご一緒にお歌いください。」のアナウンスに従って、アリーナいっぱい歌声を高らかに響かせる様子は、まさに壮観である。プログラムに歌詞が掲載されているほか、スクリーンにも歌詞が投影される。時には、秋田県警の音楽隊が伴奏を務めることさえある。この様子は、ハピネッツの公式 Twitter や YouTube などで見ることができる。

県民歌をバスケットボールの試合で歌う理由について、ハピネッツの運営会社である秋田ノーザンハピネッツ(株)代表取締役の水野勇氣は、秋田県がネット上で公開しているウェブマガジン「なんも大学」(<https://nanmoda.jp/2017/12/1351/>)において、県民歌を歌うことで、選手とブースターの気持ちを一つにできると述べている。

プロスポーツの試合で 秋田県民歌 を歌うことは、2014年(平成26年)から日本プロサッカーJ3リーグで活躍する秋田のクラブチーム「ブラウブリッツ秋田」の試合でも行われている。

このように、秋田県民歌 は、秋田県のプロスポーツと一体となって秋田の文化を盛り上げているのである。

秋田県民歌 とは

では、ここで 秋田県民歌 について簡単にご紹介したい。なお、詳しく知りたい方には、渡辺裕(2010)『歌う国民 唱歌、校歌、うたごえ』(中公新書)を一読されることをお勧めする。

秋田県民歌 は 1930年(昭和5年)10月31日に制定された。秋田県のホームページ(<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/8420>)によると、「北秋田市(旧森吉町)出身の作曲家成田為三氏が作曲し、歌詞は大仙市(旧太田町)出身の倉田政嗣氏の作品を、当時の東京音楽学校教授、文学博士高野辰之氏が修正しました。」とのことである。中山裕一郎監修(2012)『全国都道府県の歌・市の歌』(東京堂出版)は、秋田県民歌 について、日本で最古の県民歌であるとしている。

秋田県民歌 の詞は4節からなり、秋田の名勝や産業、歴史などが織り込まれている。ここでは第1節と第2節をご紹介したい。

- | | |
|---------------|----------------|
| 1 秀麗無比なる 鳥海山よ | 2 廻らす山山 霊気をこめて |
| 狂瀾吼え立つ 男鹿半島よ | 斧の音響かぬ 千古の美林 |
| 神秘の十和田は 田沢と共に | 地下なる鉱脈 無限の宝庫 |
| 世界に名を得し 誇の湖水 | 見渡す広野は 渺茫霞み |
| 山水皆これ 詩の国秋田 | 黄金と実りて 豊けき秋田 |

この格調高い歌詞に、歌曲 浜辺の歌 や かなりや で知られる成田が、八長調、4分の4拍子、「Moderato」の速度指定で曲を付けた。佐川馨(2011)「2つの県民歌 秋田県民歌 県民の歌 制定の背景(1)」(秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門)によると、この曲は9日間

という短期間で完成されたとのことである。わずか 20 小節ではあるが、付点リズムのアウトククトが特徴的な、重厚で朗々たる印象深いメロディーである。

しかし、この 秋田県民歌 は、戦後、忘れられていく。秋田県では、1958 年（昭和 33 年）の八郎瀧干拓事業着工や 1959 年（昭和 34 年）の県庁舎完成、1961 年（昭和 36 年）の「秋田まごころ国体」開催等を記念して、新たな県の歌を公募した。それを受けて 1959 年（昭和 34 年）には 県民の歌 が作られ、 秋田県民歌 は、しばらく歌われない時期が続いた。

秋田県民歌 と 大いなる秋田

では、そのように忘れられてしまった 秋田県民歌 が、今日、ハピネッツやブラウブリッツの試合のみならず、多くの機会に歌われるようになったのは、どのような事情からであったか。そのきっかけとなった作品こそ、合唱とブラスのための楽曲 大いなる秋田 なのである。

1968 年（昭和 43 年）、秋田県は明治百年記念事業の一環として、秋田にゆかりの深い作曲家である石井勲（父である舞踏家 石井獏が秋田県出身）に記念曲の作曲を委嘱した。

かねてから、秋田では音楽が盛んであった。二期会の重鎮で、オペラ 聲^{むこ}選^び（清水脩作曲）の口サンゼルス初演等でも知られるバリトン歌手 築地利三郎の活躍はもちろん、秋田市立山王中学校や県立秋田南高等学校、県立花輪高等学校の吹奏楽部が全国大会で金賞を受賞するなど活躍していた。

そこで、オルフの高弟として名高い石井は、得意のオスティナート・リズムを生かしつつ、吹奏楽と合唱のための、4 楽章からなる堂々たるカンタータを作曲した。

この 大いなる秋田 には、各楽章に合唱が挿入されており、第 3 楽章「躍進」に登場するのが 秋田県民歌 なのである。第 3 楽章はスケルツォ風の行進曲らしい曲想から始まる。オルフに学んだ石井の面目躍如たる、打楽器の活躍する楽章である。その盛り上がりが最高潮に達すると、熱情は突如として静まり、ユーフォニアムが県民歌のメロディーを優しく歌い出す。木管が続き、金管がファンファーレ風に鳴り響く。それに続く県民歌の合唱は、烏海山の山頂から秋田の広く豊かな大地を眺めるかのような、悠々たる響きである。県民歌の第 1 節と第 2 節の合唱を終えると打楽器アンサンブルが挿入され、冒頭に行進曲風の曲想に回帰する。

この 大いなる秋田 に引用されて以来、 秋田県民歌 は再び県民に広く歌われるようになった。これは、 大いなる秋田 が県内の式典等で演奏されるのみならず、中学校や高等学校の行事などでも演奏されたことが大きかったと言われている。 秋田県民歌 は、 大いなる秋田 を通して復活を遂げたのである。例年、文化の日が開催されている秋田県音楽祭では 大いなる秋田 が演奏され、多くの合唱愛好者が参加している。2018 年（平成 30 年）には、「秋田県立体育館開館 50 周年・秋田県吹奏楽連盟創立 60 周年記念 3,000 人の 大いなる秋田 特別公演」が開催された。また、数年に 1 度、首都圏の愛好者が中心となり、東京でも 大いなる秋田 の演奏会が開催されている。

さて、私事で恐縮だが、筆者自身、合唱団でテノールを歌っている。先日は所属する合唱団と共に、京都まで遠征したところである。そこで、私の印象に残っている 2 つの 大いなる秋田 につ

いてご紹介したい。まず、2004年（平成16年）長年にわたって県立秋田南高校吹奏楽部を全国大会に導いてきた高橋紘一先生が指揮された秋田県音楽祭での「大いなる秋田」である。リハーサルに現れた高橋先生は非常に痩せられており、指揮するのも精一杯という様子だった。しかし、そのリハーサルは熱く、本番では、あまりに激しい指揮のために高橋先生の眼鏡が飛んでしまったほどであった。全てを燃焼させるような感動的な本番であった。高橋先生は、それから半年ほどで亡くなったが、命を削ってまで音楽を伝えようとした先生の姿が、今も脳裏から離れない。

もう一つは、同じく2004年（平成16年）筆者の住む南秋田郡天王町（現・潟上市）が市町村合併される際に開催された「さようなら天王町・新生《潟上市》を祝う天王町大合唱祭」での「大いなる秋田」の演奏である。町の体育館で、妻や息子、地元の仲間たちと一緒に「大いなる秋田」を歌ったことは、忘れられない大切な記憶である。

筆者の例を引くまでもなく、多くの秋田県民の心の中に、このような特別な「大いなる秋田」、忘れられない「秋田県民歌」の思い出がある。それが、ハピネットやブラウブリッツの試合での「県民歌斉唱」をはじめ、様々な機会に県民歌が歌われていることにつながっているのである。

終わりに

本稿では、「秋田県民歌」とスポーツとの結び付きや、県民歌がいかに関わって私たち秋田県民にとって大切なものであるかを述べてきた。全ては書ききれず、例えば「第2のオリンピック」とも言われる「ワールドゲームズ」が2001年（平成13年）に秋田県で開催された際にも、開会式で「秋田県民歌」が演奏されたこと、同年、藤田嗣治の絵画「秋田の行事」の前で「秋田県民歌」を歌うイベントが開催されたこと、2014年（平成26年）「国民文化祭・あきた2014」の開会式でも「大いなる秋田」がメイン楽曲として演奏されたこと、昨年（2019年）作詞者・倉田の出身地である大仙市が『私の県民歌』という、「秋田県民歌」に関する市民のエッセイを集めた冊子を発行したこと、人気の高い大曲の花火大会でも、毎年、県民歌が流されていることなど、ご報告したいことはまだまだあったのだが、それらについてはまたの機会に詳述したい。

さて、ここ数年、秋田では、県出身のシンガーソングライター高橋優が主催する野外音楽フェス「秋田 CARAVAN MUSIC FES」が開催されているが、昨年（2019年）の目玉は、やはり「秋田県民歌」だった。開催地である大仙市出身の俳優 柳葉敏郎が登場し、高橋と二人で県民歌を歌ったのである。

このように、秋田の生活や文化と、「秋田県民歌」との関係は、ますます深化していくばかりである。それはスポーツに限らない。「秋田県民歌」こそは県民の宝、地域をつなぐ「オラほの、うだっコ（私たちの地域の歌）」なのである。